

近畿地方ダム等管理フォローアップ委員会 第 2 回大滝ダムモニタリング部会 議事概要

開催日時：平成 25 年 1 月 24 日(金) 16:00～18:30

開催場所：新大阪丸ビル新館 5 F 509 号室（大阪市東淀川区東中島 1 丁目 18-27）

出席委員：6 名

1. 議事

(1) 事務局より、資料-1 により「前回部会での各委員からの指摘とその対応」について説明がなされ、内容について了承された。

(2) 事務局より、資料-2 により「事業の概要」、「環境調査の概要」「モニタリング調査結果」「平成 26 年度モニタリング計画(案)」について説明がなされた後、委員による審議がなされた。主な内容は、以下のとおりである。

- ・ 試験湛水後の出水時に大滝ダム上下流で濁度が高く、このときに全窒素、全リンの値が連動して高くなっているのは、恐らく溶存態ではなく粒子態と考えられる。これらの現象は大迫ダム直下流からみられており、平成 25 年は大迫ダムで工事のために低水位管理が行われていた影響が考えられる。今後大滝ダムの湛水による水質への影響をみるためには、溶存態か粒子態かを区別できる調査を行う必要がある。
- ・ 止水性のプランクトンが試験湛水後に増加しているが、同様のことが大迫ダムの直下や津風呂ダム下流でも起きていることから、これは大滝ダムの湛水の影響とは考えられない。
- ・ 湖岸の水位変動域では、標高 290m から 300m あたりの範囲で植被率、植物種数の減少がみられており、このまま裸地化した場合には濁りの発生源となることが懸念される。対策を行う場合にはすみやかに実施する必要がある、この標高範囲を重点的に調査すべきである。
- ・ 短期間で生育する生活史の短い在来種 2 種程度をターゲットにして、湖岸緑化について検討してはどうか。
- ・ 水質の変化が植物プランクトンの増殖につながり、下流河川で付着藻類や底生動物の種構成の変化へとつながっていると考えられる。また、堤体完成後からすでに起きている下流への土砂供給の変化、それに伴う下流の河床高変化や河床材料の変化は魚類や底生動物の変化へとつながる。これらについて、それぞれがどのような関連をもって挙動しているかを整理し、湛水の影響だけでなく、長期的な視点で総合的な考察を行い、次につなげていく必要がある。
- ・ 土砂還元について、かなり礫質の還元土砂が必要と考えられる。また、横断型の早瀬が再生されるくらいの土砂量を期待したいが、治水面の検討のためにまずは過去の測量記録から下流河川の河床縦断がどのように変化してきたかの整理が必要である。土砂還元の効果や影響を予測するためには、河床変動計算が必要である。
- ・ ここ数年は大きな出水が繰り返し起きている。底生動物は出水による影響を受けやすく、ダムの下流では礫が動かず、ダムのない河川に比べて出水時に底生動物が温存される事例もあり、環境変化への応答をみるためには長期的な観点が必要である。
- ・ 土砂還元を実施するのであれば、モニタリング調査を終えた平成 27 年度以降も下流河川で継続的に調査を行う必要がある。
- ・ 外来魚（特にオオクチバス）について、ダム管理の中で侵入を完全に防ぐことは事実上不可能と考えられる。
- ・ 猛禽類は大滝ダムだけでなく全国的にみて貴重な情報の蓄積となるため、調査頻度が

下がってもフォローアップ調査を実施すべきである。

(3) その他

- ・ 次回の部会を平成 27 年度早々に予定している点について、平成 26 年度はデータは年度の途中までのものでよいので、今回の指摘をふまえたとりまとめ案をもって個別に相談いただきたい。できれば平成 26 年の内に総合解釈の確認の場が欲しい。夏から秋に現地で議論できるとよい。

以上